

神奈備乃伊波瀬乃杜之喚子鳥痛莫鳴吾戀益

〔後撰和歌集<sup>十四</sup>〕忍びてすみ侍りける人のもとよりかゝるけしき人にみずなといへりければ

元方

立田川たちなば君がなをおしみいはせの杜のいはじとぞ思ふ

〔和泉式部集<sup>二</sup>〕みちさださりてのち帥の宮に參ぬときゝて

赤染衛門

うつろはでまばしゑのだの森を見よかへりもぞするくすのうら風

〔日本書紀<sup>推古<sup>十二</sup></sup>〕六年四月難波吉士磐金至自新羅而獻鵲二候乃俾養於難波杜因以巢枝而産之

〔新古今和歌集<sup>戀<sup>十三</sup></sup>〕宮つかへしける女をかたらひ侍けるにやむごとなきおとこのいりたちて

平定文

いふけしきを見てうらみけるを女あらがひければよみ侍りける

偽をたゝすの森のゆふだすきかけつちかへわれをおもは

〔後拾遺和歌集<sup>戀<sup>十三</sup></sup>〕清家がちゝのもとにあはの國にくだりて侍りけるときかの國の女に物い

ひわたり侍りけりち津國になりうつりてまかりのぼりけたば女たよりにつけてつかはしける

心をばいくたのもりにかくれどもこひしきにこそまぬべかりけれ

〔ねざめのすさび<sup>二</sup>〕吾妻森

大江戸龜戸天神のうしろを四五町ゆきてかしこの畑中にありこの社をやまとだけのみこと

の御妻橘姫の靈をまつれりと物にしるせりされどうけがたき説なりとおもひをりしにこの

頃藤原茂睡入道のえらばれし鳥のあとゝいへる歌集をよめるにくだんの森を題にて鳥がな

くあづまの森を見わたせば月に入江の波ぞしらめるといふ歌ありて自注に吾妻森は東人と

いふ人の住し所とぞ本所横堀三日の東にありとしるしたり東人といへるはいつの頃の人に